

実存的アプローチと 唯物論的フレームワークにおける補完性 —「疎外」の概念をもとにした検討—

田嶋 英行*

実存的アプローチは Donald Krill を代表的な論者とするものであるが、その多くは「疎外 (alienation)」に悩むクライアントを支援の対象にしている。ここでいう「疎外」とは、自らが存在する意味を把握することができず、自己のあり方が不安定な状態にあること、を意味する。一方でとりわけ Krill による実存的アプローチが、たしかに「疎外」の問題に焦点を当てているが、資本主義社会における本質的問題としての「疎外」には、必ずしも十分に言及することができてはいない。ここでいう「疎外」という事態は、かつて Karl Marx が指摘したものであり、資本によって象徴される物による支配によって、必然的に生み出されるものである。ソーシャルワークのアプローチのなかで、Marx による見解をもとに展開されたものとして「唯物論的フレームワーク」が挙げられる。これは Steve Burghardt によって論じられたものであり、そしてそれは、ソーシャルワークの実践理論に Marx の唯物論を取り入れたものとして位置づけられる。本稿では、クライアントの「疎外 (疎外感)」を理解していく際に、これらのアプローチを補完的に用いていくことの必要性について論じている。

Key words : 実存, 唯物論, ソーシャルワーク, 「世界=内=存在」, 疎外

I. はじめに

これまでソーシャルワークにおいては、周知の通り、さまざまな実践アプローチが提唱されてきた。それらを包括的にまとめた Francis Turner による *Social Work Treatment* においては、初版 (1974 年) では 14 アプローチ、第 2 版 (1979 年) では 19 アプローチ、第 3 版 (1986 年) では 22 アプローチ、第 4 版 (1996 年) では 27 アプローチ、第 5 版 (2011 年) では 36 アプローチ、第 6 版 (2017 年) では 38 アプローチが掲載されており、最新版では初版のおよそ 2.7 倍の数のアプローチが収録されている。このようにアプローチ自体が多岐にわたってきており、そしてそれはすなわち、ソーシャルワーカーが対応すべきクライアントも同様に多

様化している、とも考えられることになる。

一方でこれらのアプローチが互いにまったく関連することなく、それぞれ独立して成立しているというわけでは、必ずしもない。Florence Hollis らによる心理社会的アプローチ (Psychosocial Approach) と Jessie Taft や Virginia Robinson らによる機能的アプローチ (Functional Approach) が、それぞれ、米国における正統派精神分析理論としての自我心理学と、その分派としての意志心理学を源泉としていることから、互いに相反する方向性にあるという関連性があつたり、また問題解決アプローチ (Problem Solving Approach) や課題中心アプローチ (Task-Centered Approach) などが、それぞれプラグマティズム (pragmatism) の影響を受けつつ成立していったりする、といった

* 人間学部人間福祉学科

ことが例として挙げられるであろう。一方で表面的には関連性がないように思えるものの、実際にはそれがあつたという場合も見受けられる。それが本稿で取り上げる実存的アプローチ (Existential Approach) と、唯物論的フレームワーク (Materialist Framework)¹⁾ である。

実存的アプローチは Donald Krill を代表的な論者とするものであるが、その多くは「疎外 (alienation)」(Krill 1978: 1) に悩むクライアントを支援の対象にしている。ここでいう「疎外」とは、自らが存在する意味を把握することができず、自己のあり方が不安定な状態にあること、を意味する。本稿では Krill によって展開された実存的アプローチに焦点を当てていくが、他にもこのアプローチの論者の一人である Jim Lantz によれば、人間はつねに、自らの存在することに意味を感じ続けることが必要であり、それを感じることができない場合には、必然的に無意味感や虚無感に襲われるという。不安や抑うつ、絶望、混乱、さらにはアノミー (欲求や行為の無規制状態) を体験するようになっていくのである (Lantz 1986: 125)。また別の論者である David Weiss は Krill と同様に、現代に生きる人間が陥っている苦境としての「疎外 (alienation)」を挙げている。人びとはアイデンティティの危機や混乱した状況に陥っており、この無意味感や虚無感がともなう「疎外」や孤独といった状況に悩まざるを得なくなつている (Weiss 1975: 18-9)。したがって現代のソーシャルワーク専門職は、とりわけこの「疎外」に対して、何らかの対応をおこなっていくことが求められる、と考えていくのである。

一方で西光義敏によれば、とりわけ Krill による実存的アプローチが、たしかに「疎外」の問題に焦点を当てているが、資本主義社会における本質的問題としての「疎外」には、必ずしも充分に言及することができてはいない、という (西光 1982: 21)。ここでの「疎外」という事態は、かつて Karl Marx が指摘したものであり、資本によって象徴される物による支配によって、必然的に生み出されるものである。Marx は「資本主義社会においては、人間の生活が疎外され、人間的諸力や文化、社会的な諸関係が疎外された形態で展開

されざるをえないことを論じた」(岩佐 2010: 13) が、Krill を代表とする実存的アプローチの論者はこのことを充分には把握できていない、と批判したのである。つまりあえて単純化して表現するならば、実存的アプローチは「疎外感」については扱っていても、それを生じさせる「疎外」に対して、あまりに無頓着であるということになる。

周知の通り Marx は、「1844 年の経済学・哲学手稿」において、「疎外された労働」について論じている。彼はここで、労働者が労働をおこなうことで生産物 (商品) をつくり出すことは、延いてはその生産物 (商品) が労働者にとって「一つの異物として、生産者からは独立な一つの力として対峙してくるということにほかならない」(Marx = 1975:431) と述べている。つまり「労働者の、彼の労働の産物にたいするあり方が何か他人のものにたいするごときあり方」(Marx = 1975:432) となり、結果として「労働者が身をすりへらして働けば働くほど、彼が自分に対抗したものと作り出す」(Marx = 1975:432) 対象的世界は「ますます強力なものになり」(Marx = 1975:432)、一方で「彼自身、彼の内面的世界がますます貧しくなり、彼自身に属するものはますます少なく」(Marx = 1975:432) なっていくのである。そうすると、さきに挙げた実存的アプローチにおける「疎外 (または、疎外感)」のような現象の背景には、この Marx が指摘する「労働の疎外」という厳然とした事実があるのではないか。

ソーシャルワークのアプローチのなかで、Marx による見解をもとに展開されたものとして「唯物論的フレームワーク」が挙げられる。これは Steve Burghardt によって論じられたものであり (Burghardt 1996)、そしてそれは、ソーシャルワークの実践理論に Marx の唯物論を取り入れたものとして位置づけられる。先の「疎外された労働」は、さらに資本家による労働者の「搾取」を生み出していく。「マルクス主義的分析は、膨大な商品生産における転嫁関係に特有な経済的搾取 (economic exploitation) と心理的疎外 (psychological alienation) の両者を明らかにする」(Burghardt 1996: 420-1) のであり、Marx によるならば「疎外」という現象は、資本家と労働者の間にみられる「搾

取」と密接に関わり合っているのである。

一方で Marx による理論枠組みだけでは、Krill らが焦点を当てたような「疎外（または、疎外感）」について理解することができないこともまた事実である。たしかに Burghardt がいうように、資本家と労働者との関係は「より多くの不調和をつくり出す身体的・精神的な疲労や家族根絶 (uprooting)、(公害などの) 他の問題を引き起こしていく」(Burghardt 1996: 418) が、一方でそういった事態が個人々に具体的にどのような影響を及ぼしていくのかについては、Marx やそのソーシャルワーク実践での応用編である Burghardt によって、十分に明らかにすることができない。そこで必要となってくるのが、実存的アプローチである。これはクライアントを実存 (Existenz) として捉えていく。すなわち、「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」(茅野 1968: 93) するとみていくのである。さらにとりわけ Krill によるものは、彼ら自身を、「世界 = 内 = 存在 (being-in-the-world)」(Krill 1978:38) として規定する。彼らを理解していく際には、その「ユニークな『世界観 (world view)』」を理解することが最も重要 (Krill 1974: 295) なのである。このアプローチによって、クライアントが資本主義社会において、資本家と労働者が織りなす「構造」のなかに投げ込まれつつあることによって、「労働の疎外」という事態のもとで生活を送らざるを得なくなり、結果的に無意味感や虚無感をともなった「疎外（または、疎外感）」に悩むようになる、とみていくことが可能になる。彼らは、まさに資本主義の「世界」を生きているのであり、彼ら自身の「疎外（または、疎外感）」を理解するためには、Burghardt のいう唯物論的フレームワークと Krill による実存的アプローチの両者が、同時に求められてくると考えられるのである。本稿では、クライアントの「疎外（疎外感）」を理解していく際に、これらのアプローチを補完的に用いていくことの必要性について論じていく。

II. 先行研究の検討

本稿ではソーシャルワークにおける実存的アプ

プローチと、Marx による唯物論の影響下にあるアプローチ (フレームワーク) に焦点を当てていくが、とりわけ前者の代表的論者として Krill を、後者の代表的論者として Burghardt を取り挙げていく。一方でそれら以外にも、両アプローチともに論者がおり、ここではそれらの内容についても検討をおこなう。

1. 実存的アプローチの場合

実存的アプローチは、人間の存在のあり方、すなわち実存に焦点を当てた援助枠組みであるが、それは「自分自身や家族など、親しい者の死の受容、病いと障害の受容、死別体験、大災害後遺症、疎外、孤立、差別などにかかわる問題が一般的、抽象的ではなくクライアント自身の『私の生』」(村田 2000:202) を問うものとして位置づけられている。

まず Krill と同じように、「疎外」の問題に焦点を当てて論を展開した者として、すでにさきに言及した Weiss を挙げるができる。Weiss は、現代に生きる人びとは自らのアイデンティティの危機や混乱に悩みつつあり、無意味感や虚無感をともなった「疎外」や孤独に陥っているという (Weiss 1975: 18-9)。「生産者と消費者が織りなす経済活動のなかに放り込まれることによって、あたかも物のように番号がつけられ、数えられ、分類されてしまう」(Weiss 1975: 18) ののである。これは、Martin Buber のいう「われ-それ」の関係性において生きざるを得ないということであり、人格的關係が排除された状況で生活せざるを得ない、ということである。Weiss はこのような状況にある人びとには、「実存的エンカウンター (existential encounter)」(Weiss 1975: 19) が必要になると考えた。つまり、そのような人びとが援助者という他者と出会うことによって、より親密な関係性を形成していくことが求められる、というのである。いわゆる「われ-なんじ」の関係性において人格的な関わりをもとに、その生きる意味や目的を見いだしていくよう、援助が展開されていくことになる。

つぎに、同じくさきに述べた Lantz が挙げられる。Lantz は家族への支援において、Viktor

Frankl のロゴセラピーの思想および手法にもとづいた実践を展開していった。Lantz は、自らの意味を見出すことのできない実存的空虚感に悩む人びとには、自らが苦悩するなかで意味を見つけていくことが求められると考え、援助者との関わりを通じて、他者との間における「本来的なコミュニケーション」(Lantz 1987: 78) を取り戻し、それによって自らが存在する意味を再発見することを促したのであった。

さらに実存的アプローチの論者として、Niel Thompson を挙げることができる。Thompson は、Jean Paul-Sartre の実存主義 (existentialism) の思想をもとに、自らの援助枠組みを展開していった。Thompson はクライアントを本質的に自由な存在として規定したが、その際に課題になってくるのが、彼ら自身を取り巻く環境としての社会政治的コンテキスト (sociopolitical context) である。彼らにおける本来的な自由は、ただ成立するものではなく、この社会政治的コンテキストによって規定されることになる。つまり個々のクライアントにおける実存的自由 (existential freedom) は、この社会政治的コンテキストによって規定されるのであり、したがって実存とは個人的であると同時に、根本的に社会政治的であると考えられるのである。援助者の役割は、クライアントの実存的自由を実現するため、彼ら自身が彼らの手によって、その社会政治的コンテキストにおける自由 (liberty) を形成していくようにすることにある。本来的な実存は「自分自身が自由であることとともに、自分の行為や自分自身のあり方だけでなく、人類すべてのあり方にも責任を有する」(Thompson 1992: 185) ののである。

さいごに挙げられるのが、本稿で取り挙げる Krill である。Krill は現代の人間が陥っている「疎外」の問題に焦点を当てつつも、彼ら自身の存在を実存として、さらには「世界 = 内 = 存在」(Krill 1978: 38) として規定していった。さらに彼らを理解していく際には、その「ユニークな『世界観 (world view)』」を理解することが最も重要 (Krill 1974: 295) と考えたのであった。Krill の実存的アプローチが他と異なるのは、この「世界」といういわゆる存在論的概念を用いて、クライアント

の存在を理解しようとしたところにある。

そもそもクライアントが実存として存在するということは、ただの物体が物存在することとは大きく異なっている。椅子や机が存在するのは異なっており、あくまで「自分の存在することへ向かって自分を関わせつつ存在」(茅野 1968: 93) するのである。それはすなわち、クライアントが存在することと椅子や机が存在することには、存在論的に差異があるということである。Krill は、この存在論的差異について論じた哲学者 Martin Heidegger の見解をもとに自らの援助枠組みを展開しており、そしてこの点が他の実存的アプローチの論者とは大きく異なっていると考えられるのである。そして本稿においても、Krill におけるその特異な点に着目していくことになる。

2. 唯物論的アプローチ (フレームワーク) の場合

Marx や Friedrich Engels の影響を受けたソーシャルワークのアプローチ (フレームワーク) については、古くは 1972 年に、Robert Knickmeyer によって論じられている。ソーシャルワーク専門職は「疎外という現象の原因についてより理解し、さらにそれに対して何らかの対応を求められる」(Knickmeyer 1972: 64) のであり、したがって Marx が用いたアプローチが有用になると述べている。また Paul Corrigan と Peter Leonard は、資本主義制度における Marx 主義アプローチのあり方について論じている (Corrigan and Leonard 1978)。それには、Marx による理論を日々のソーシャルワーク実践に用いつつ、さらに政策のあり方にも影響を与えていくことによって、社会のあり方そのものをも変えていこうとする意図をもつものとなっている。さらに新しいところでは、Paul Garrett がソーシャルワークと Marx 主義の関連性について論じている (Garrett 2009)。そこではとりわけ、ソーシャルワークの実践が新自由主義 (neoliberalization) に抵抗するために、いかに Marx の知見を活用していけばよいかについて論じている。

一方で Marx や Friedrich Engels の影響を受けたソーシャルワークの援助枠組みは、ラディカルソーシャルワーク (radical social work) の系譜に

連なるものとして認識されてきたという経緯もある。その枠組みは人びとが、「社会経済的構造のコンテキストのなかで抑圧されつつある」(Bailey and Brake 1975:9) 状況についてみていこうとするのであり、したがってソーシャルワーク専門職も「人びとが自らの疎外状況を理解し、さらにそのなかで自尊心を育むことができるよう」(Bailey and Brake 1975:9) 支援を展開していく。したがって必然的に、資本主義社会において「人間の生活が疎外され、人間的諸力や文化、社会的な諸関係が疎外された形態で展開されざるをえないことを論じた」(岩佐 2010: 13) Marx や、その相棒の Engels 理論の影響を大きく受けることになっていったのである。たとえば Jeffery Galper は、古典的な Marx 主義の考え方を現代に通じるように解釈し直し (updating classical Marxism), 新たに資本主義に根ざした「人種差別 (racism)」(Galper 1980: 51) や「階級闘争 (class struggle)」(Galper 1980: 51) といった課題について論じている。また Iain Ferguson は、これまで過去 30 年以上にわたって「階級 (class)」がソーシャルワークの課題であり続けてきており、さらに今世紀においても、それがまた別の形態で課題になっていくことについて考察しているが、その際にやはり Marx によるアプローチについて、改めて検討をおこなっている (Ferguson 2011: 128-9)。

このようにソーシャルワークアプローチの領域においても、Marx や Engels の影響を受けた論者は少なからず存在しているが、ケースワークやグループワーク、さらにはコミュニティオーガニゼーションといった個別の方法論にそれらの思想や理論を直接的に反映させた者は、筆者の知る限りでは、本稿で焦点を当てていく Burghardt 以外に存在していない。

以上の経緯から本稿では、実存的アプローチについてはクライアントの実存としての存在のあり方をよりの確に捉えた Krill に、唯物論的アプローチ (フレームワーク) はソーシャルワークの個別の方法論について論じている Burghardt に、焦点を当て論じていく。

Ⅲ. 土台と唯物論

資本主義社会は、上部構造と土台 (下部構造) という 2 つの要素によって成り立っている。そして、この土台における「生産 (経済) 力 (force)」(Burghardt 1996: 412)こそが、上部構造としての「社会の制度 (学校や教会, 裁判所等)」(Burghardt 1996: 414) を規定する。またソーシャルワークも「資本主義の一部」(Burghardt 1996: 415) であり、上部構造に根づいている。それは決して、資本主義の「外側に存在することはない」(Burghardt 1996: 415)。唯物論的フレームワークは、上部構造としての社会制度よりも、まずはその前提としての土台に焦点を当てていく。特定の時代における「生産 (経済) 力が歴史において演じた中心的役割を強調する」(Burghardt 1996: 412) 唯物論者の立場をとっていくのである。

「生産 (経済) 力」に焦点を当てた人類の歴史、すなわち史的唯物論では、中世における生産形態では「労働の生産物はだれのものであるべきか、という問題は全然起こりようがなかった」(Engels = 1968: 209) とみていく。なぜなら生産者は自らが所有する原材料を用いて、自分自身の労働手段を用いつつ、生産をおこなっていたからである。したがって、結果としての生産物も「まったくおのずから彼のものであった」(Engels = 1968: 209) のであり、「あらためてわがものにするまでもなかった」(Engels = 1968: 209)。のちに資本主義にもとづいた生産形態が登場すると、生産という営みには、生産諸手段を有する資本家と労働力を提供する労働者が登場することになり、生産物は実際に生産諸手段を現実にかし、それを生産するひとのものではなく、資本家が所有するものになっていった。資本主義社会が成立するにつれ、生産諸手段を所有する資本家たるブルジョワジーと、生涯にわたり自らの労働力を売ることによって、生計を立てる終身賃労働者としてのプロレタリアートが生み出されていくことになったのである。

IV. 「労働の疎外」と商品の交換および「物件化」²

ここでは Burghardt による唯物論的フレームワークにおいて、必ずしも十分な論述がなされていない「労働の疎外」および「物件化」について、関連文献をもとに述べていく。

まず「労働の疎外」とは、労働者が労働をおこなうことで商品をつくり出すことによって、その商品が労働者にとってひとつの疎遠な存在として、独立した力として労働そのものに対立することであった。労働者の労働力の結晶としての生産物（商品）は、結局のところ自分のものにはならず、生産諸手段を保有する資本家のものになる。さらにこの生産物（商品）は、他の生産物（商品）と交換されることにより、世の中で流通していく。最も単純な交換は $xA = yB$ 、つまり「 x 量の商品 $A = y$ 量の商品 B 、あるいは六〇キログラムの米 = 一着の上衣という関係」（山西 2008: 96）というように表されていく。この式においては、「六〇キログラムの米という商品の価値が一着の上衣という別の商品の使用価値量で表現されて」（山西 2008: 96）いるのである。そして次第にこれら両者の交換には、貨幣が介在していく。貨幣は商品交換から生成するのであり、「日々無数におこなわれる商品交換においてこのようなプロセスが不断におこなわれていることによって、日々連続的に貨幣がつくりだされている」（山西 2008: 96）のである。労働者の労働力は生産物（商品）へと姿を変え、さらには貨幣という形態に行きつく。また生産物（商品）の交換が発達していくと、その交換を円滑に進めていくための貨幣が「商品交換システムの結び目に位置」（山西 2008: 100）づけられていく。生産物（商品）を生産していく際のひとつとひとつの関係性、互いに助け合って生産するという関係性は「商品と商品の交換関係に、さらに商品と貨幣との交換関係に、さらには、貨幣と貨幣の交換関係におきかえられ引き裂かれ」（山西 2008: 100-1）ていく。つまり直接的な人間関係が、貨幣を介在した間接的関係へと変容していくのである。

労働者の労働力自体も、一つの商品と化していく。労働者は労働力を資本家に売ることによって、

自らの生活の糧を、賃金という形で受け取る。「労働者は人間として登場する前に『労働力』として登場する」（大河内 1980:233）のであり、「資本主義社会における人間の規定は何よりも『労働力』であることを宿命としている」（大河内 1980:233）のである。労働者は自らが生き延びるため、労働力を売ることが余儀なくされ、「実質的には労働者が資本家という他者によって、商品として扱われざるを得ない事態を現出」（田上 2011: 41）させていく。つまり労働者は商品化することになり、一つの Sache（モノ）として売り買いされ、「物件」（田上 2011: 42）と化していく。資本家は、自らが所有する生産諸手段を用いて資本を生み出していくが、その際には労働者が提供する労働力を買うことでその作業自体を進めていく。ここで注目すべきは、労働者が資本家の生産諸手段を使うのではなく、生産諸手段が労働者を使うということである。労働者は資本家に雇われているのであり、いわば主が資本家であり、それに従うのは労働者である。生産諸手段が資本家によって所有されている限り、必然的に生産諸手段が主になり、労働者はそれに従うという関係性になっていく。そしてここで、労働者の労働力の結晶としての生産物（商品）は、結局のところ自分のものにはならず、生産諸手段を保有する資本家のものになる。生産物（商品）が労働者にとって、ひとつの疎遠な存在として、独立した力として労働そのものに対立するようになり、さきに述べた「労働の疎外」が生じてくる。労働者の「物件化」が、延いては「労働の疎外」を生み出していくのである。

V. 唯物論的フレームワークのソーシャルワーク実践への応用

Burghardt は唯物論的フレームワークの実践への応用のあり方として、1) コミュニティオーガニゼーション、2) グループワーク、3) ケースワークの3つの場合について述べている (Burghardt 1996:421-7)。以下、その概要について記していく。

1. コミュニティオーガニゼーションへの応用

Burghardt は 1980 年代前半の米国のホーム

レス対応のための政策動向の例を挙げている (Burghardt 1996: 421-2). ここではおもに、政策策定過程において弁証法的方法 (dialectical method) を用いていくことの重要性について述べている. 当時の Reagan 政権における利潤蓄積への強力な後押しは、増加するホームレスや失業者対策のための社会的費用の膨張を引き起こした. この局面における弁証法的方法とは、すなわち、「貧困者のほうに引っ張る力をあえて加えることによって、『矛盾を高める (heighten the contradiction)』ように作用させる」(Burghardt 1996: 422) というものになる. そしてこの方法によって、「利潤蓄積への強力な後押し」は、いづれ切り崩されていく. このように、唯物論的フレームワークのコミュニティオーガニゼーションへの応用は、「課題」そのものを引き起こしている何らかの作用と相反する方向に、あえて強力に引っ張り返すことによって、かえってその作用自体を切り崩していこうとする. ただしこのような弁証法的アプローチは、「現在の社会関係についての支配階級の現状における優位性を否定せずに、宿命論に屈服していくことは決してない」(Burghardt 1996: 422) のであり、必然的にその時代の支配層との間に軋轢が生じるようになっていく.

2. グループワークへの応用

Burghardt によれば従来のグループワークにおいても、たしかに、弁証法的探究 (dialectical inquiry) はおこなわれてきているが、それはあくまで、グループワーク内のソーシャルワーカーとクライアント、および支援システムの間のみられるものに限られており、土台 (下部構造) に焦点を当てるものになっていない. つまりそれは、「唯物論者的な解釈に抵抗を示している」(Burghardt 1996: 422) のである. Burghardt はグループワーク理論の代表的論者の一人である William Schwartz の見解を挙げている (Burghardt 1996: 422). Schwartz は自ら、グループワークを以下のように図式化している (Schwartz 1971: 1259).

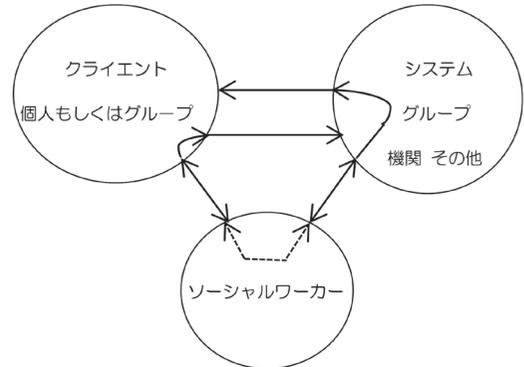


図1 Schwartzによるグループワークの見取り図

Schwartzによれば、グループワークの展開においてはまず、クライアントおよび支援システムにおいて交渉する必要のある「ニーズ (必要性) の共通基盤を探求していく」(Schwartz 1971: 1260). たしかにこの構図は弁証法的関係、すなわち、クライアントと支援システム間における互いに矛盾する関係性を見出してはいる. 一方でやはり、上部構造としてのグループワークという「社会の制度」に焦点を当てているものの、それ自体を下支えする「生産 (経済) 力」を生み出す土台に目を向けているとは必ずしもいえない、のである.

Burghardt はグループワークにおいて重要なのは、特定の課題を指向する活動を基盤にした支援よりも、個々のメンバーが抱える個人的で情緒的なニーズに焦点を当てつつ、さらにそのような個々の問題に埋め込まれている、政治的かつ社会的な要因に目覚めていくことにあると考えている (Burghardt 1996: 422-3). そのうえで、個々人のニーズの根底にある土台のあり方に焦点を当てることができるようにしていく、のである. そしてその際には、ソーシャルワーカーとクライアントの間に弁証法的探究が展開されていく. そうすることによって、かりに問題解決を阻む壁が見えてきたとしても、実現可能な変化を生み出し続けていこうとしていくのである (Burghardt 1996: 423). つまりこのフレームワークは、短期的に解決が可能な課題を設定していくより、むしろ、より長期的な社会変革を指向することによって、「構造」のあり方そのものを変えていこうとするのである.

3. ケースワークへの応用

唯物論的フレームワークの基盤にある Marx や Engels の理論では、必ずしも、個人が抱える問題に焦点が当てられてきたわけではない。なぜなら彼ら自身が「個人的な関係性をほぼ除外し、政治的経済を強調したから」(Burghardt 1996: 423) である。しかし資本主義の世界に生きる人間は、当然のことながら、その制度自体から大きな影響を受けつつ存在している。このことについて Burghardt は、以下のように述べている (Burghardt 1996: 424)。

資本主義体制下の制度、すなわち家族や学校、宗教団体、そしてサービス提供機関は、そもそも「この世界がどうなっているのか」についての考え方を強いる特定のプロセス (価値観、行動基準、サンクションなど) を発達させてきている。

資本主義制度は人びとが労働する場合だけでなく、その生活そのものに大きな影響を与えている。そうであるならば、クライアント個人を対象とするケースワークにおいても、当然のことながら彼らがつねにその影響下にあることを前提に、支援が展開されていかなければならない。一方でソーシャルワークの歴史的展開、とりわけケースワークについては、正統派精神分析の流れを汲む自我心理学の影響を強く受けてきた、という経緯がある。それは自我の強化という個人々の強さを強調するのであるが、一方でそれは、クライアント個人の努力では対処できない「集合的で社会的な変革」(Burghardt 1996: 425) の必要性をも顕在化させていく。唯物論的フレームワークは、まさにこの点に焦点を当てていくのである。たとえば Burghardt は、女性が抱える摂食障害という課題について、以下のように述べている (Burghardt 1996: 425)。

拒食症と過食症は、女性たちが多大な情緒的な努力を傾けなければならない「女性固有」の課題であるとされているが、それらの問題は、実際には 20 世紀後半の資本主義が強化した、

消費好きで性的にパワフルではあるものの、一方で経済的にかつ社会的には無能であるという女性のイメージを促した、特殊な形態の性差別主義によるところが大きい。

拒食症や過食症といった摂食障害は、個々の女性に多くみられる個人的課題ではあるものの、その背景には資本主義がつくり出した女性イメージが存在しているとも考えられる。そしてそれは、多かれ少なかれ、企業の利潤追求に都合のよいものになっている。彼女らは、企業が自らの利潤を追求するために生産した商品やサービスを、あくまで受け身のまま消費し続けるだけの存在として規定されており、そのような障害に苛まれ続ける個人々は、資本主義社会において消費という側面で搾取されつつある、とも考えられるのである。彼女たちが企業の意のままに消費すればするほど、その利潤の蓄積は加速していく。したがって彼女たちが、これらの症状に苦しむことがないようにするためには、このような状態にある個人々への支援に止まらず、さらに、そのようなイメージそのものを女性たちに無理強いしない社会を実現していく必要がある。そうでなければ多くの女性たちが、今後も、そのような現象に「何世代にもわたって」(Burghardt 1996: 425) 苦しみ続けなければならない。

Burghardt による唯物論的フレームワークが一貫して関心を払っているのは、「生産 (経済) 力」を生み出す土台 (下部構造) のあり方である。増加するホームレスや失業者対策のための社会的費用の膨張といったコミュニティオーガニゼーションにおける課題も、グループワークにおける個人々のメンバーが抱える特定の課題も、女性における摂食障害といったケースワークの課題も、延いては、資本主義体制下の土台における「生産 (経済) 力」が引き起こしている、とみていくのである。それらの課題のより根源的な部分には、資本主義体制下における企業の利潤追求にまつわる生産と消費の搾取という事態が、根強く存在しているとみていくのである。

VI. Krill による実存的アプローチと「世界 = 内 = 存在」

Krill による実存的アプローチは「疎外(または、疎外感)」という問題に焦点を当てていくのであった。一方でそれは西光が指摘していたように、資本主義社会における本質的な問題としての「疎外(労働の疎外)」は、必ずしも十分に把握できていない。資本主義体制下において労働者は、資本家に自らの労働力を売ることによって、その生計を立てていかざるを得ない。自らが商品と化していくことによって「物件化」し、自らが生産したはずの生産物(商品)も、生産手段を有している資本家のものとなっていく。生産物(商品)はひとつの疎遠な存在として、独立した力として労働そのものに対立するようになり、結果として「労働の疎外」という事態が生じていくのである。Krill による実存的アプローチの論者も、本来であればクライアントが抱える「疎外(または、疎外感)」について、Burghardt のように「生産(経済)力」を生み出す土台のあり方をもとに、自らの分析を進めていくべきであったのではないだろうか。なぜなら、かりにそのつど個々のクライアントの「疎外(または、疎外感)」すなわち「心理的疎外」に対処できたとしても、そもそも、それ自体を生み出す「経済的搾取」構造に目を向けていかない限り、そのような現象自体がなくなることはないからである。

一方で唯物論的フレームワークでは、たしかに「生産(経済)力」を生み出す土台のあり方に焦点を当てていくものの、実際にそれが個々のクライアントに具体的にどのような影響を及ぼすのかについて、十分に明らかにすることができない。なぜなら、その理論的基盤となっている Marx や Engels が「個人が抱える問題に焦点を当ててきたわけではない」からであり、かえって「個人的な関係性をほぼ除外し、政治的経済を強調」(Burghardt 1996: 423)してきたと考えられるからである。

さきにも述べたように Krill による実存的アプローチはそもそも、Heidegger による「世界 = 内 = 存在」という概念を重視したものである。そも

そも私(わたくし)という存在は、「世界(world)から分離することができない」(Krill 1978: 38)のであり、ソーシャルワーカーにとって、クライアントの「ユニークな『世界観(world view)』を理解することが最も重要」(Krill 1974: 295)となってくる。さらにクライアントは「世界 = 内 = 存在への応答のこの瞬間において、選択の自由と意味の形成を経験する」(Krill 1974: 301)。つまりこのアプローチにおいてはまず、クライアント自身を「世界 = 内 = 存在」として理解していくことが求められてくるのである。

「世界 = 内 = 存在」における「世界」とはすなわち、ある限られた領域における人間が共有するコンテクストであり、「(限定された)普遍的な規範」(門脇 2008: 99)とでもいえるものである。それは「文化的・制度的」(門脇 2008: 56)であり、そこには、その領域固有の「前理論的に暗黙のうちに伝えられ、受け入れられてきた多くの約束事やふるまいの型」(門脇 2008: 56)が埋め込まれている。たとえば門脇俊介は、この「世界」について、以下のように説明している。その内容は、ある会社における女性社員 W について述べたものである。この女性社員は職場のなかで、より「女性らしく」生きることを重視している。具体的にはそのなかで女性らしく、お盆という道具を使って、お茶汲みという作業を率先しておこなっているという(門脇 2008: 99)。

お盆を用いてなされる「湯呑みを運ぶという仕事」は、彼女と職場を共有している男性社員という他者-あるいは一般にお茶を供される他者-なしには、意味を失う。さらに重要なことは、「女性らしく生きる」という W の行為や道具連関を方向づけている「主旨」の理解は、文化 C という局所的コンテクストを生き、かつそのコンテクストの型を保持し続けている文化 C の成員としての自己了解だということである。W は彼女一人で、「女性らしく生きる」という主旨を世界に投じているわけではない。その主旨は文化 C の成員に共有された型であり、成員のそれぞれがその型を保持し続けているのでなければ成立しないが、しかし、成員の

それぞれに対しては(限定された)普遍的な規範として、一定の拘束力を発揮する。

ここで重要なのはその「世界」が、その領域に生きる他の人間によっても、共有されているということについてである。さきにも述べたように女性社員 W は、職場のなかでより「女性らしく」生きることを重視しているのがあったが、「女性らしさ=お茶汲み」という構図自体は、構成員全体が共有しているということが求められてくる。なぜならそうでなければ、彼女がとった行為そのものが「女性らしい」ということにならなくなるからである。この「女性らしさ=お茶汲み」という構図は、職場におけるある種の「(限定された)普遍的な規範」として、「女性らしく」生きようとする彼女自身に対して、一定の拘束力を発揮することになる。

この女性 W の事例は、職場における女性社員の「女性らしさ」がどのように規定されているかを示しているのだが、職場は仕事を³⁾する場所なので、当然のことながら労働者観、すなわち、「社員らしさ」もしくは「職員らしさ」といったものをも規定する³⁾。たとえば過労死という悲惨な事態を生み出す職場には、そもそもその規定自体が、非人間的なものである場合が多い。生産手段を保有している資本家にとっては、「機械設備などの労働手段を遊ばせておくことは大きな損失」(小森 2008: 50)であり、必然的に「機械設備を二十四時間稼働させ、労働者を二十四時間働かせたい」(小森 2008: 50)と考える傾向が強い。資本家における利潤のさらなる追求は、必然的に労働者の酷使という事態を招き、結果として過労死を生み出してしまうとも考えられるのである。

さきに述べたように Krill による実存的アプローチは、「疎外」に悩むクライアントを援助するために展開されたのであった。しかしそれは、いわば「疎外感」の問題であり、社会経済的に生み出される「疎外」延いては「労働の疎外」といった事態を不問に付しているのではないかと、とも考えられるのであった。ここでいう「労働の疎外」とは、生産物(商品)が労働者にとってひとつの疎遠な存在として、独立した力として労働そのもの

に対立するようになることである。また労働者の労働力自体も一つの商品と化していく、のであった。また労働者は労働力を資本家に売ることによって、自らの生活の糧を賃金という形で受け取るのであるが、それが延いては「実質的には労働者が資本家という他者によって、商品として扱われざるを得ない事態を現出させる」(田上 2011: 41)のであり、そしてそれは「物件化」という概念によって表わされることになる。いずれにせよ資本主義制度のもとに生きるわれわれは、土台(下部構造)における「生産(経済)力」の影響下において生活せざるを得ない。

Ⅶ. 「疎外(または疎外感)」、「労働の疎外」、「物件化」についての再検討

Krill は自らの主著において、離婚経験のある女性の事例を挙げている(Krill 1978: 147-53)。女性は 40 歳であり、3 人の子どもがいる。彼女が抱えるもっとも大きな課題は、子どもたちが反抗的な態度であることであった。援助のための面接が、10 ヶ月にわたって 17 回おこなわれた。一方で彼女には、新たなボーイフレンドがいた。初回面接では、3 人の子どもすべてがこの女性(すなわち、母親)への怒りと悲しみを吐き出すという事態に陥った。子どもたちは、母親が自身の仕事とボーイフレンドにばかり注力し、自分たちに十分な関心や配慮が払われていないと感じていたのである。さらに彼女による子どもたちへのしつけが、首尾一貫していないとも感じていた。この女性(母親)は、自らが自律した存在であろうとすることと、子どもたちやボーイフレンドといった他者への依存の間を揺れ動く自己不確実性、つまり「疎外」に悩むクライアントと規定され得るのであった。

事例では、この女性のこれまでの他者に対する態度の変更を迫ることに、援助の力点が置かれた。つまり、彼女自身の子どもたちへの頑ななまでの態度に最大の課題がある、とみていったのである。そして面接を重ねていくにつれ、彼女自身が自分について客観視することが可能になり、彼女自身、「母親としてのコンピテンスの感覚」(Krill 1978:

151) を獲得できるようになっていった。Krill においては前述の通り、クライアントの「ユニークな『世界観』を理解することが最も重要」(Krill 1974: 295) とされるが、そもそも彼女が多くの課題を抱えるようになった背景には、「仕事」があった。彼女は離婚してから博士号を取得し、専門職としてのキャリアを追求していた。一方で「仕事」自体が過重であり、「繰り返される要求や重い責任、そして終わることのないさらなる発展的機会の一連の追求」(Krill 1978: 150) が重荷であった。「しばしば夜間や週末も、仕事のために時間を割く」(Krill 1978: 150) ことになり、結果として「子どものためにかける時間とエネルギーの不足」(Krill 1978: 150) が生じていた。彼女はまさに、キャリアを最優先する「世界」に生きていた、と考えられるのである。

Krill においては「他者とのつながり」(Krill 1974: 280) が重んじられ、援助者であるソーシャルワーカーとのつながり、さらにはクライアント自身の家族とのつながりの形成が促されていく。一方でこの事例を Burghardt による唯物論的フレームワークによって解釈するならば、クライアントの態度にではなく、あくまでその労働のあり方に焦点が当てられていくであろう。彼女が博士号保持者として勤めているのが公的な非営利機関であるのか、営利を目的する企業の研究機関であるのか明確でないため、彼女自身が生きる「世界」が「利潤を最大限に追求しようとする資本主義のあり方に根づいたもの」であるとは、必ずしも断定できない。しかし彼女自身が自らの労働力を売り、その見返りとしていくばくかの報酬を受け取る労働者であることは、たしかであろう。つまり彼女は、最少のコストによって最大の成果を求められる一介の賃労働者に過ぎないのである。Krill は、クライアント自身にみられる情緒的混乱や他者との関係の不安定さといったことに焦点を当てていくが、一方の Burghardt であれば、彼女自身が過剰な労働を強いられている事態を問題視していくであろうし、そのうえでクライアントとともに弁証法的探究を展開していくことによって、個々の問題に埋め込まれつつある、政治的かつ社会的な要因に目覚めることを促進していくで

あろう。さらに「生産（経済）力」を生み出す土台（下部構造）の分析に、もっとも力を注いでいくであろう。そしてこの土台をもとにクライアントの課題をみていくならば、Krill のいう「疎外（または、疎外感）」はそもそも、彼女自身が賃労働者として自身を商品化することによって一つの Sache(モノ) として売り買いされるようになり、「物件」と化していくことから生じている、さらには、自分の生活を犠牲にすることによって得た労働（研究）の成果自体が、ひとつの疎遠な存在として、独立した力として労働そのものに対立する「労働の疎外」がもとになっている、と考えられることになってくる。

一方で Krill においては、クライアントを実存としてかつ「世界 = 内 = 存在」として捉えていくのであり、「疎外（または、疎外感）」に悩むクライアントの実像を描き出すことが可能である。これは、資本主義構造をもとにクライアントを把握しようとする Burghardt だけでは、必ずしも充分ではないと考えられるのである。

VIII. おわりに

実存的アプローチにおいてはその代表的論者である Krill にみられるように、クライアントにおける「疎外（または、疎外感）」という現象に焦点を当てていく。ただしそれは、資本主義社会の本質的問題としての「疎外（労働の疎外）」、もしくは「物件化」という課題について、必ずしも充分な言及がなされていないのであった。一方、Burghardt による唯物論的フレームワークが一貫して関心を払っているのは、「生産（経済）力」を生み出す土台（下部構造）のあり方である。このフレームワークは、個々のクライアントに具体的にどのような影響を及ぼすのかについては、必ずしも十分に明らかにすることができない。Krill は、クライアントを実存としてかつ「世界 = 内 = 存在」として把握していくのであり、その「世界」を生きる存在としてみていく。ただしその「世界」は、あくまで資本主義に根ざしたものである。「文化的・制度的」なものであり、上部構造のあり方に対応している。またこの上部構造は、あくまで

土台(下部構造)によって規定されるのである。

Krillによる実存的アプローチは、Burghardtによる唯物論的フレームワークによって補完されることにより、現代の資本主義社会に生きるクライアント像を、より明瞭に浮き彫りにしていくことが可能になる。その存在は、中立的で抽象的なものというよりは、むしろクライアント自身が資本主義体制下の「構造」のなかに投げ込まれつつあることによって、「物件化」または「労働の疎外」という事態のもとでの生活を送らざるを得ず、結果的に、無意味感や虚無感をともなった「疎外(または、疎外感)」に悩むようになる、とみていくことが可能になるのである。

さきにBurghardtが「資本主義体制下の制度、すなわち家族や学校、宗教団体、そしてサービス提供機関は、そもそも『この世界がどうなっているのか』についての考え方を強いる特定のプロセス(価値観、行動基準、サンクションなど)を発達させてきている」(Burghardt 1996: 424)と述べていることについて記したが、ソーシャルワークも資本主義下の制度の1つとして機能していく限り、やはりその影響のもとに自らの「世界観」を展開している、とみていくべきであろう。本稿では、とりわけKrillによる実存的アプローチが「疎外(または、疎外感)」という現象を取り挙げつつも、さらにBurghardtによる唯物論的フレームワークの見解を参考にすることで、それ自体が資本主義制度下の個人における帰結とみていくことが可能になることを示した。クライアントにおける「無意味感」や「虚無感」といった感情について、ただ心理学的に理解し対処しようとするだけでなく、むしろ資本主義という経済システムが生み出す必然的事態であることを、まずは明確に認識することが求められてくる。

またKrillにおいては、「他者とのつながり」(Krill 1974: 280)という概念を重んじていくのであり、まずは援助者であるソーシャルワーカーとのつながり、さらにはクライアント自身の家族とのつながりを形成していこうとする。ただしこれについても「疎外」という事態がクライアントの感情の域に止まらず、資本主義制度がもたらす必然であるとするならば、「他者とのつながり」という概

念を過度に強調することが、かえってこの制度自体が抱える本質的な課題、すなわち、「物件化」や「労働の疎外」といった諸問題を隠ぺいすることにつながっていくことが危惧される。たとえば、過労自殺を生み出すような土壌のある企業では、伝統的に「家族主義」(大室 2017: 69)が根強く残っているという。より多くの利潤を追求せざるを得ない企業という組織が、「『会社は一家、社員は家族』というフィクション」(大室 2017: 77)をつくりあげることで、労働者の労働力自体が「一つの商品と化していく」ことや、「労働者の労働力の結晶としての生産物(商品)は、結局のところ自分のものにはならず、生産諸手段を保有する資本家のものになる」ことが、ひた隠しにされていくという事態が懸念されるのである。社員と社員の「つながり」、延いては社員と経営者との「つながり」を強調することで、個々の労働者が、現実には資本主義制度が本質的に抱えている「搾取」という事態に自らが直面していることに目を向けないよう誘導していく、のである。一方で、多くの労働者がこの「家族主義」によって守られ、さらには職業人として育成されてきているという側面もまた、否定できない。社員同士、延いては社員と経営者の「つながり」が個々の社員を簡単に解雇せず、くわえて、長期にわたって多額の資金を投入することによって、個々人に、さまざまな職業上の知識やスキルを身につけさせてきた、とも考えられ得るのである。資本主義体制下にあるソーシャルワーク諸論においては、それらのなかで語られるさまざまな概念や言説について、唯物論的な観点をもとに、改めて批判的に検討していくことが求められているのではないだろうか。

さらにBurghardtによる唯物論的フレームワークは、さきにみた通り、上部構造としての社会制度よりも、まずはその前提としての土台に焦点を当てていくのであった。そもそも資本主義制度下における生産という営みには、生産諸手段を有する資本家と労働力を提供する労働者という2者が登場するのであり、そしてそこに「労働の疎外」や搾取といった事態が生じるのであるが、資本家が資本を蓄積しようとする、もっと原初的には人間自体が何らかのモノやカネを蓄積しようとする

のは、それ自身が実存として「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」(茅野 1968: 93) しつつ、かつ「世界 = 内 = 存在」として存在するからではないだろうか。Heidegger は人間が不安から逃避するために、換言するならば、自らの存在の根源的な「無」から目を背けるために、日常性へと頹落しつつあることを指摘したが、この状態においては「さらに新しく見ることへと向い、新奇なもの世界へと自分を引き渡してしまう」(門脇 2008: 138)。昨今一般的に流布している表現を用いるならばそれは、まさにイノベーションである。ひとはこれを起こすため資本を蓄積し投資するのであり、イノベーションを起こした結果として資本を蓄積し、さらにその蓄積された資本を新たなイノベーションへとつなげていこうとする。経済学におけるこの「イノベーション」(Schumpeter) という概念や、もしくは「アニマル・スピリット」(Keynes) といった概念の根源には、この頹落における「見ることの欲望」が潜んではいないだろうか。そしてそれを起こすこと自体は、人間が根本的に不安であること、さらには根源的「無」であることからの逃避⁴⁾に過ぎない、ともいえるのではないか。唯物論的な思考そのものも、実存や「世界 = 内 = 存在」といった実存論的な概念によって、改めて解釈することも求められるのかもしれない。

注

- 1) 「唯物論的フレームワーク」は、Turner による Social Work Treatment の第 4 版で採用された名称である。一方第 3 版では、同じ内容のものが「Marx 主義理論とソーシャルワーク (Marxist Theory and Social Work)」として掲載されている (Burghardt 1986)。
- 2) 「物件化」とは Versachlichung の日本語訳であるが、これまでは「物象化」と訳されてきた経緯がある。田上孝一によれば、この用語を「物象化」と訳すのはかならずしも適していない (田上 2011: 41)。そもそも Marx における Versachlichung は、労働者のあり方を問う「存在論的な次元を可視化する概念」(田上 2011: 41) のはずである。すなわち、労働者が一つの

Sache(モノ)として売り買いされるようになることを問題視するものであり、「物として現れている存在か、存在が物として現れることをいう」(田上 2011:41) 認識論的な概念ではないはず、なのである。したがって「物象」という、認識論的な概念を表わす訳語は適切ではないと考えられることから、本稿ではこの田上の見解をもとに、Versachlichung の日本語訳をあえて「物件化」としている。

- 3) 隈栄次郎によれば個人が作り上げたはずの小社会のうち、「土台」によって規定されつつ作られなければならないものがあるという。それが職場である。個人にとって「当該企業はそこが好きだから就職したわけではない」(隈 2018: 29) もの、「ともかくも就職することで自己の生計費の源泉を得ようとした行為の結果」(隈 2018: 29)、そこが職場になったのである。そしてそこがまさに、「土台の規定を受ける」(隈 2018: 29) のである。
- 4) 最近とくに進歩が著しい人工知能 (AI) は、まさにイノベーションの賜物であると考えられるだろうが、この人工知能が人間の仕事を奪ってしまうのではないかと懸念されている。人間がこの人工知能をつくり出すことによって、それ自体が人間にとってひとつの疎遠な存在として、独立した力として人間そのものに対立するのであれば、まさにそれは、「疎外」という事態の端的な事例の一つとして考えられはしないだろうか。それがそのように、人間の活躍する余地 (仕事の範囲) を狭めていくとすると、これまで述べてきたようにこのようなイノベーション自体、人間が不安から逃避するために、すなわち、自らの存在の根源的な「無」から目を背けるために生み出されたものだとするならば、結果として却って自分たち固有の領域を狭め、生きづらさを促していることになる。皮肉な話とはいえないだろうか。

引用文献

- Bailey R. and Brake, M. (1975). Introduction: Social Work in the Welfare State, Bailey R. and Brake, M. ed., *Radical Social Work*, Edward Arnold, pp.1-12.
- Burghardt, S. (1986). *Marxist Theory and Social Work*

- Practice, Turner, F. ed., *Social Work Treatment* (3rd ed.) Free Press, 590–617.
- Burghardt, S. (1996). A Materialist Framework for Social Work Practice, Turner, F. ed., *Social Work Treatment* (4th ed.) Free Press, 409–33.
- Corrigan, P. and Leonard, P. (1978). *Social Work Practice under Capitalism: a Marxist Approach*, Macmillan Press.
- Engels, F. (1962). Die Entwicklung des Sozialismus von der Utopie zur Wissenschaft; *Karl Marx – Friedrich Engels Werke*, Band 19, Institut für Marxismus–Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 189–228. (= 1968, 寺沢恒信・村田陽一 訳「空想から科学への社会主義の発展」大内兵衛・細川嘉六 監訳『マルクス・エンゲルス全集 第 19 巻』大月書店, 186–225.)
- Ferguson, I. (2011). Why Class (Still) Matters, Lavalette, M. ed., *Radical Social Work: Social Work at the Crossroads*, Policy Press, 115–34.
- Galper, J. (1980). *Social Work Practice: A Radical Perspective*, Prentice–Hall.
- Garrett, P. (2009). Marx and 'modernization': Reading Capital as Social Critique and Inspiration for Social Work Resistance to Neoliberalization, *Journal of Social Work* 9(2), 199–221.
- 岩佐茂 (2010). 「マルクスの構想力」岩佐茂 (編著)『マルクスの構想力–疎外論の射程–』, 社会評論社, 11–5.
- 門脇俊介 (2008). 『「存在と時間」の哲学 I』, 産業図書.
- 茅野良男 (1968) 『実存主義入門–新しい生き方を求めて–』 講談社.
- Knickmeyer, R. (1972). A Marxist Approach to Social Work, *Social Work*, 17, 58–65.
- 小森治夫 (2008). 「労働時間と過労死」, 基礎経済科学研究所 (編) 『時代はまるで資本論』, 昭和堂, 30–57.
- Krill, D. (1974). Existential Social Work. Turner, F. ed., *Social Work Treatment*, Free Press, 276–313.
- Krill, D. (1978). *Existential Social Work*, Free Press.
- 隈栄次郎 (2018). 『「上部構造」の社会学—主体の意思と歴史過程—』, 合同フォレスト.
- Lantz J. (1986). Family Logotherapy. *Contemporary Family Therapy*, 88, 124–35.
- Lantz J. (1987). The Use of Frankl's Conception in Family Therapy. *The Journal of Independent Social Work*, 2 (2), 65–80.
- Marx, K. (1968). Ökonomisch–philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844; *Karl Marx–Friedrich Engels Werke*, Ergänzungsband erster Teil, Institut für Marxismus–Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 465–588. (= 1975, 真下信一 訳「1844年の経済学・哲学手稿」大内兵衛・細川嘉六 監訳『マルクス・エンゲルス全集 第 40 巻』, 大月書店, 385–512.)
- 村田久行 (2000). 「実存主義理論—ソーシャルワークと実存主義理論」, 加茂陽 (編) 『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』, 世界思想社, 195–218.
- 大河内一男 (1980). 『社会政策 (総論) 増訂版』, 有斐閣.
- 大室正志 (2017). 『産業医が見る過労自殺企業の内側』, 集英社.
- 西光義敏 (1982). 「米国における実存主義的ソーシャルワーク」, 龍谷学会 (編) 『龍谷大学論集』, 421, 2–23.
- Schwartz, W. (1971). Social Group Work: The Interactionist Approach, *Encyclopedia of Social Work*, 16th Issue, Vol. II, NASW, 1252–63.
- 田上孝一 (2011). 「マルクスの物象化論と廣松の物象化論」, 経済理論学会 (編) 『経済理論』, 第 48 巻 2 号, 40–9.
- Thompson, N. (1992). *Existentialism and Social Work*, Avebury.
- Weiss, D. (1975). *Existential Human Relations*, Dawson Collage Press.
- 山西万三 (2008). 「商品・貨幣と消費社会」, 基礎経済科学研究所 (編) 『時代はまるで資本論』, 昭和堂, 89–117.

(受稿日 :2020.10.13 受理日 :2020.10.22)